

## 1 本研究の背景と目的

大阪芸術大学短期大学部の入学生は、入学する時点においてピアノの経験が無い、若しくは無いに等しい状況で入学を迎える学生が毎年増加の一途を辿っている状況であり、ピアノ初心者が1年間(選択授業を含めると2年間)でピアノを弾くこと及び弾き歌いを演奏することが容易に実演出来るように至るまでには、相当な苦心を伴うことは、令和2年度塚本学院教育研究補助費成果論文で述べたとおりである。そのため、当該論文においては、ピアノ初心者が少しでも童謡曲を演奏し易くするツールの1つとして、童謡曲にみられる〈付点8分音符+16分音符〉のリズムにおける演奏法並びに教授方法の一端を考察した。ところが、本研究の考察中において、コロナウイルス感染状況拡大により、本学においても一部の期間に遠隔授業が余儀なくされた。遠隔授業時に筆者が担当した音楽Ⅲ、Ⅶの授業は、zoomを用いたリアルタイム双方型の授業形態であった。パソコンの画面越しに向かったの授業は、理論上は意思の疎通が可能であるものの、教授する側としては、様々な苦心や工夫が必須の授業であった。令和2年度から取り入れられたオンライン授業という授業形態は、短大の歴史を振り返っても前例が無い授業形態である。不測の事態として用いられた授業形態であるが、この2年間の稀に見る授業形態における教授内容をフィードバックし、今後不測の事態が生じ、再び遠隔授業になった際の教授方法の一端として活かすために、今年度はオンライン授業と対面授業における相違を明確にしながら研究の一考察を行うことにした。

研究内容が膨大になることが予想されるため、今年度の研究は、対面授業とオンライン授業(リアルタイム双方型)の相違を考察した上で、前年度に考察を行った〈付点8分音符+16分音符〉のリズムに関する教授内容が、対面授業とオンライン授業とで、教授内容に相違が発生するのかどうか、また、相違が発生した場合の内容や原因を考察することを目的とする。

## 2 研究の内容と方法

今年度の本校における授業形態は、前期初回の授業に対面授業が実施され、4月16日付の授業から緊急事態宣言が解除される6月20日までが遠隔授業であった。そのため、本研究は、遠隔授業時及び緊急事態宣言後の対面授業時(後期10月末まで)の考察を中心とする。

本研究は初心者を中心に考察を進めたことから、前期数回分の授業は、音を正しく読むことや、正しいフォームで演奏すること、両手で演奏することに慣れる必要があったため、授業の最初から筆者が令和2年度塚本学院教育

研究補助費成果論文にて研究を行った〈付点8分音符+16分音符〉のリズムが見られるこどもの歌を演奏することに取り組むことは出来ない状況であった。そのため、少しずつ当該リズムが見られる童謡曲を遠隔授業の途中から取り入れ、考察を行った。

研究の過程としては、先ず当該リズムを遠隔授業において初心者の学生に習得させるにあたり、対面授業と遠隔授業という異なる授業形態においての実技を通じた比較を中心に、それぞれの授業形態での特性を精査し、相違を明らかにする必要がある。その上で遠隔授業の授業形態において当該リズムの教授を行い、対面授業に切り替わってからも同様の考察を続けた。また、本研究はこれに終わらず、考察を行った当該学生には後期授業終盤に、対面授業及び遠隔授業に関するアンケートを実施した。アンケート結果を基に、筆者が教授している意図や、授業で得た内容及び所見と、学生の対面授業及び遠隔授業に対する所見の相互を探り理解することにより、教授する内容が指導者側の一方的な理解や所見でなく、教授する指導者側並びに教授を受ける学生側の相互の視点から、よりの確かなフィードバックを見出し、今後の授業教授内容に繋げることを結論としている。今回の研究結果から得た教授方法が全ての学生に当てはまるかどうかは定かではないが、学生の童謡における弾き歌いを演奏する上で技術的向上に活用することが出来れば、本研究によって本学(短期大学部)保育学科の授業にとっても、また、学生にとっても効果的な教授方法に資することができるものと考えられる。

## 3 まとめ

本研究は、対面授業と遠隔授業という異なる授業形態における相違を考察するという研究課程を辿るものの、最終的には実技に関する考察が中心となるため、たとえその考察が論理的であったとしても確たる証拠がない限り、考察内容及び結果を断定することは出来ない。しかし、本研究では〈付点8分音符+16分音符〉のリズムにおける特性を述べ、学生の演奏において現状の把握や演奏意識を確認しながら、正しい奏法との相違の要因における考察を重ねてきた。そして、その考察から、学生が当該リズムを演奏し易くするツールの1つとして導き出すことができ、ピアノを弾くこと及び弾き歌いを演奏することが容易に実演することが出来た。この試みによって培われた演奏技術は、本学を卒業し、保育現場に携わる際の演奏にも紐付けることが可能となり、有意義な結果が得られたと考えられる。